第15回 日本在宅医学会大会

ランチョンセミナー⑧

日時 2013年3月31日(日)
12:10～13:10

会場 ひめぎんホール メインホール
〒790-0843 愛媛県松山市道後町2丁目5番1号
TEL (089) 923-5111 FAX (089)923-5112

「早期から食べる、最後まで食べる」

座長 若林 秀隆 先生
横浜市立大学附属病院市民総合医療センター
リハビリテーション科 助教

講師 小山 珠美 先生
社会医療法人社団 三思会 東名厚木病院
摂食嚥下療法部 課長

共催：第15回日本在宅医学会大会／株式会社大塚製薬工場

第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	ランチョンセミナー
共　　催	株式会社　大塚製薬工場
タ イ ト ル	早期から食べる　最期まで食べる
日　　時	平成 25 年 3 月 31 日　12：10～13：10
会　　場	メインホール
演　　者	東名厚木病院摂食嚥下療法部･小山　珠美先生
座　　長	横浜市立大学附属市民総合医療センター･　若林　秀隆先生
企 画 趣 旨	「口から食べる」ということは、栄養を摂り、味を楽しみ、生きる意欲を高めるなど、人として幸せに生きていくための根幹をなす生活行動である。しかしながら、加齢に伴う脳疾患や呼吸器疾患などによる摂食･嚥下障害が生じると、最大の楽しみである食へのニーズが満たされないばかりか、生きる希望の喪失をも招く。時として、誤嚥性肺炎を懸念するがあまりの絶飲食の強制、安易な代替栄養、関係者のスキル不足などは、高齢者の尊い健康生活を脅かし、病との闘いの上にさらなる苦渋を与えかねない。 　特に、急性期医療を受けている患者は身体状態が安定しておらず、誤嚥性肺炎などのリスクも高い。しかし、絶食期間を長くして、強制栄養や間接訓練のみを施すだけでは、経口摂取の早期実現どころか、廃用症候群による負の連鎖を引き起こす。高齢者のＱＯＬは著しく低下の一途を辿り、医療や介護に関わる経済的逼迫をも引き起こす。そのためにも、誤嚥性肺炎のリスクと対峙しながら経口摂取を継続していく実践的スキルとリスク管理が重要となる。加えて、関係する専門職の資質、チームワーク、地域連携なども不可欠である。 　昨今では、摂食・嚥下リハの取り組みは確実に増えているが、まだまだ支援への熱意やスキルをもった関係者が不足している。病院、福祉施設、在宅、どこで生活していても、人間としてのごく当たり前の“口から美味しく食べ続けたい”という願いを実現できる高齢社会への変革が必要である。 　どんなに口から食べることに困難を有していても、最期の人生を閉じようとしているその時まで、美味しく幸せな気持ちで食べ続けたいと切実に願っているのは本人である。その願いを実現すべく包括的支援を注ぐことが、高齢社会に生きる我々の責務であり、未来への継承となる。 　本セミナーでは、筆者らが取り組んできた急性期医療における早期経口摂取再獲得のノウハウと地域連携システムを紹介する。また、当院へ寄せられた相談事例の数々を通して、経口摂取を閉ざされている患者・家族の実情と課題についても再考したい。